

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	クレシ 好美
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部准教授	野中 葉
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	田島 英一
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	清水 唯一朗
	副 査	早稲田大学 人間科学学術院	名誉教授	店田 廣文
学力確認担当者：				
クレシ好美君の学位請求論文は「日本に暮らすムスリム第二世代——「生きられたイスラーム」の視点から——」と題し、日本に暮らすムスリム第二世代が、外国ルーツと宗教的背景を持つことによる重層的な周縁化を経験しつつ、〈ムスリムであること〉にどう向き合おうとするのかを考察した。先行研究が、モスクやイスラーム団体などの組織に紐づく超可視的なムスリムを代表化させてきたのに対し、ヨーロッパのムスリム研究の新たな枠組みである「生きられたイスラーム (lived Islam)」や「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」の概念が、これまで描かれてきたムスリム像の解像度を上げつつある。本研究は、これを日本のムスリム研究に応用することで、組織に紐づいていない場合が多い第二世代の多様な実態を明らかにした。第二世代 75 人への「二人称的かわり」による質的調査と、103 人分の量的調査および6年分の参与観察によって得られた結果を、「生きられたイスラーム」の視点から分析した。 本論文は序章のほか、7つの章より構成する。全体を大きく2つに分け、第1章から第3章で本研究の分析の前提を述べ、第4章から第7章で調査に基づいた分析を論じる。各章の内容は、以下の通りである。 第1章では、研究の枠組みと先行研究について論じた。ヨーロッパのムスリム研究において近年用いられる「組織に属さないムスリム (non-organized Muslims)」と「生きられたイスラーム (lived Islam)」という概念を検討し、この枠組みに基づいて分析する本研究の新規性を示した。そして、すでに蓄積のあるヨーロッパの第二世代研究がこれまで明らかにしてきたことと、前述の枠組みを用いた研究が新たに示した視点を概観し、本研究の方向性を確認した。そのうえで、日本に暮らすムスリムに関する先行研究において、これまで何が語られ何が語られてこなかったのか、また今後何を明らかにしていくべきなのかを整理した。 第2章では、第二世代が日本に誕生するまでの経緯をたどり、日本におけるムスリムと第二世代がおかれている現状について論じた。具体的には、第一世代である外国人ムスリムの来日から定住、そしてムスリム家庭を築くまでの小史を概観し、その中で第一世代が日本社会とどう関わってきたのか、そして第二世代にどのような視線が注がれているのかを検討することで、日本のムスリム研究における本研究の位置づけを確認した。 ここまでの背景を踏まえ、第3章で改めて本研究の問いの妥当性を確認し、調査の概要と分析の方法について示した。 第4章と第5章では、「第二世代の生きられた経験はどのようなものか」を考察した。第二世代が抱える問題や葛藤にはさまざまな要因があるが、かれらを取り巻く環境として最も影響力の大きい家庭環境と学校生活に焦点を絞り、聞き取りや参与観察で得られた第二世代の語りを引用				

しながら、そこに共通する経験について考察を進めた。具体的には、ムスリム家庭における宗教継承の理想と現実について、第二世代当事者の生きられたイスラームの経験を引用しつつ、家庭環境においてどのような問題や葛藤の原因があるのかを第4章で論じ、さらに第5章で、第二世代が経験する複合的な周縁化の要素について検討するとともに、教員や生徒・学生などの視点にも着目して、学校生活においてどのような問題や葛藤の原因があるのかを論じた。

第6章では、5人の第二世代のライフストーリーを取り上げ、「第二世代は〈ムスリムであること〉にどう向き合うのか」を考察する。家庭や学校で直面する問題の解決や葛藤の克服のあり方はさまざまであるが、青年期の問いに、かれらなりの答えを見つけようと模索する生きられたイスラームの経験を丁寧に描いていた。

第7章では、これまでの議論を振り返り、研究の問いに対する答えを見つけることを試み、最後に、本研究の学術的意義と社会的意義をまとめるとともに、残された課題と今後の展望について言及した。

第二世代の語りからみえてきたのは、家庭で行われる宗教継承に負担を感じながら、親の愛情を求めて無理する者が少なくないこと、そして親の目に良きムスリムとして映る子のなかには、実は大きな葛藤に懊悩する者がいることである。一方、学校生活における経験として、周縁化の様子とそれゆえに抱く周囲への同化願望の切実さ、さらにはそれがイスラームの名のもとに課される義務や禁忌といった実践によって叶えられないことへの戸惑い、またそこから生じる親世代との距離感もうかがえた。こうした状況において、第二世代の〈自分とは何者か〉への答えは、発達の過程で経験する環境や出会いによって変容する。その際、〈ムスリムであること〉と日本人として生きることの葛藤を乗り越えるために、イスラームの知識の獲得と理解者の存在が重要な役割を果たすことが確認された。

日本のムスリム研究は、これまでモスク建設や組織活動などをはじめとして活発に活動した第一世代のムスリムを対象に行われてきた。本論文は、これまでほとんど研究されてこなかった第二世代に焦点を当て、不可視的な個人の宗教性を生きられた経験から明らかにした研究であり、日本のムスリム研究の新たな地平を開くものとして十分に学術的意義を持つ。クレシ君自身が結婚を機に改宗した日本人ムスリムであり、本研究で論じてきた第二世代を育てる母である。本論文はこうした筆者の立場性から「二人称的かわり」を通じ、彼らの経験を再構築したものである。従来の三人称的視点からの研究とは異なるアプローチで、当事者の自己呈示を明らかにし、日本のムスリム第二世代の解像度を高めることに大きく貢献した。本論文が扱ったテーマは、エスニックマイノリティや宗教2世の問題など、現在の日本社会が抱える様々な社会問題や、隣接する研究分野とも接続する可能性を持つ。そうした点から、クレシ君の博士論文は、広く公開されて学術界ならびに社会的に認知されるべきものであり、成果を世に問う価値は大変に高いと言える。

以上、本論文を通して著者は、先端的研究を行うために必要な高度な研究能力、ならびに、研究対象を徹底的に探究する姿勢、そしてその基礎となる豊かな学識を有することを示した。その成果は日本のムスリム研究の発展に確かな一歩として位置づけられることは疑う余地がない。よって、本学位審査委員会はクレシ好美君が博士（政策・メディア）の学位を授与されるにふさわしい資格があるものと認める。